国際緊急援助隊医療チームの四川大地震における大規模病院支援活動
―ＩＣＵでの活動―

（宮本純子ほか、日本集団災害医学会誌 16: 244-248, 2011）

2016 年 7 月 15 日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

2008 年 5 月 12 日、中国四川省汶川県を震源とするマグニチュード 8.0 の地震が発生し、国際緊急援助隊医療チーム（Japan Disaster Relief Medical Team）(以下、JDR)が派遣された。活動場所となった四川大学華西医院は、四川省最大の基幹病院で、総病床数は 4300 床、120 床の集中治療室（Intensive Care Unit ; ICU）を保有する巨大病院である。JDR 看護師は当初救急外来と ICU とに分かれて 2 名ずつ配属されたが、その後、華西医院看護部の要請により、4 名が ICU を支援することとなった。この体験をふまえて、災害時の国際医療支援における集中治療看護の問題を検討し、報告している。

JDR 医療スタッフは、救急外来、ICU、透析室、放射線部門に分かれて病院を支援することとなり、7 名の看護師のうち 2 名が胸部外科 ICU に配置され、現地スタッフと共に看護活動を行った。中国語を十分に理解できない JDR 看護師が看護記録、薬剤投与、輸液管理を担当することは実際上極めて困難であるため、これらは現地スタッフが担当し、JDR 看護師は、①合併症に対するケアと予防②創部のケア③早期回復を目的とした活動④清潔介助を担当することとした。

被災地内あるいは被災地近傍の病院が、大災害後に急増する患者によって混乱し、スタッフが疲弊しがちであり、その負担軽減のために国内外の救援医療チームが派遣される。今回の活動は従来の JDR の医療形態とは異なる病院支援型の活動となったので病院内での現地スタッフとの協働が必須であった。今回の国際災害救援活動を通して、日本国内での日常の看護活動では学ぶことのできないさまざまな学びがある。第一はコンサルテーションの知識で、発想をもつことが支援関係を構築する上で役立つのではないかということ。第二は災害という看護資源が不足している状況において、患者の予後改善のために取り組まなければならない優先度の高い看護ケアを再認識させること。第三は医療文化の相違の中で、筆者自身にも、また一緒に働いた現地スタッフにも、看護ケアの再認識と行動変容を見ることができたことである。

効果的な援助のニーズがどこにあるかを、活動を続けながらも迅速に評価し、活動の軌道修正をしていく必要がある。他国スタッフと共に看護活動を展開するには相互理解が重要で、共に働くにあたり現地スタッフに敬意をもって接する姿勢がなければ協働に至る関係性は構築されず、活動や援助は成り立たないであろう。JDR 看護師が現地スタッフの負担軽減をめざし、合併症予防を主眼とした活動を実施できたのは、現地スタッフの協力姿勢があってこそである。今後の活動でも上記のことを理解していなければならないと考える。